内なる情念 画面に

第6回 絹谷幸二賞

若手画家の意欲的な創作を応援し、具象絵画の可能性を明くことを目的にした第6回絹谷幸二賞（毎日新聞社主催、三井物産協賛）は、山下耕平さん（29）に決まった。奨励賞には寺林武洋さん（32）が選ばれた。贈呈式は3月13日、東京都千代田区の学士会館で行われる。

「にんじん」2013年 ©Kohei Yamashita

山下耕平さん

＝和田大典撮影

やました・こうへい 1984年、兵庫県生まれ。佐賀大文化教育学部卒。福岡県筑紫野市在住。

昨年は、大きな挑戦の年であった。その成果が認められての受賞。「本当にうれしいです」。少し恥じらいながら笑顔を見せる。

九州では数年前から注目を浴びる存在、第3回絹谷幸二賞でも候補にあがった。当時は、漫画のような表情の人物像が中心。クロッキー帳にためてきた素描をモチーフに、ポップでありながらどこか陰影を帯びた群像を描いてきた。

「この方法だと、何度も描き直してしまう。今回は何も参照せず、手を加えずぎずにストローク（筆運び）を生かそうと決めました」。さらに、支持体のベニヤ板を顔の輪郭に最初に切り取り、描く部分を限定する「縛り」を課した。大首絵のごとく、正面勝負の人物画が完成した。

自画像とは明言しないが、自身の内なる情念が画面にあふれてきた。福岡市のギャラリーとわーる、東京・銀座のギャラリー58での個展は、前年の展示とは一変。縦182㌢、横91㌢の大作「道中無題」9点は目力があり、人間の複雑な感情を表現。「にんじん」など小品も高く評価された。

ここまでの道は、平たんではなかった。中学時代は不登校に。デザイン科のある高校で描くという目標を見つけ、大学時代は理解ある先輩と出会い、グループ展に参加した一方、「他者の目線を意識しすぎて描けなくなった時もありました」。だが、大竹伸朗さんの大規模個展を見て、衝撃を受けた。「画家の一般的イメージとまったく違った。とにかくやればいいんだ、と覚悟ができました」

「道中無題」は、道半ばで迷いもあるという心情を表した。「挑戦は始まったばかり」と自覚している。【岸桂子】

具象絵画の可能性開拓

日本を代表する画家の一人で、日本芸術院会員の絹谷幸二さん＝写真＝が2008年、毎日新聞社に呼びかけて創設。絹谷さんは1974年、具象絵画の登竜門となっていた安井賞（本社主催、96年度の第40回で終了）を31歳で受賞。画家として生きる自信を獲得した体験を伝えたいと思い立った。創作の傍ら後進の指導にも力を注ぐ。東京芸術大名誉教授、大阪芸術大教授。

対象は35歳以下の画家。国内で前年に開かれた展覧会などで発表した、具象的傾向の出品絵画を選考する。賞金は本賞100万円、奨励賞50万円。

人物と真正面から対峙

明治学院大・山下裕二教授

絹谷幸二賞の山下耕平さんは、孤独な営みの中で、とてつもないエネルギーをひそやかに充填し続けて、今まさに画面に爆発させている作家だと思う。彼の作品は、ほとんどが人物を描いたもの。かつては、キャラクターが際立つポップな描写が賑やかな画面を形成していたが、2013年の個展で発表された作品は、彼の想念の中に棲む人物と真正面から対峙するような、より強度を増したものとなった。奨励賞の寺林武洋さんは、数年前から私が注視してきた作家。だが、作風はまったく異なる。ゴミ箱、ガスレンジ、ドアノブ、郵便受け……。身の回りのいかにも情けないモチーフを徹底的に見つめる。近年もてはやされている、ありがちな写実絵画とは一線を画する真摯な表現だ。今年もまた、まったく異なる方向性の作家に賞を与えられたことを喜ばしく思う。

■選評

展覧会ごと新たな表皮

大阪電気通信大・原久子教授

山下耕平さんの絵は展覧会のたびに脱皮するように新しい表皮をのぞかせる。今回の選考対象となった彼が個展で発表した作品はともに肖像で、自画像だ。自画像は美術史を振り返っても、作家たちが自己を見つめるために、あるいは描くことを突きつめる研究のために描いている。構図の取り方、色遣い、塗りの悠々とした無骨さと、擱筆するタイミングの引け際は絶妙で、さらに或る繊細さも共存させ、他の候補作品を寄せ付けないエネルギーが彼の試みのなかに認められた。

一方、そこに在るすべてを写しとろうと愚直に目の前のものと向き合い描き続ける寺林武洋さん。日常から1枚ずつフレーミングされた絵に、見ることと描くことの関係性の連鎖の面白さがある。可能性を感じる作品に遭遇できたときに走る衝撃を2人の絵に感じることができた。

探し求めていた秀作

美術家・鴻池朋子さん

その絵が何のモチーフであれ、自分が絵を見ている時に、その中に何をしでかすかわからないような野蛮で凶暴性を秘めたものを常に探している、という事にある日気付いた。これは理由などなく、狩猟する動物のように私は絵という獲物と対峙しているのだ。そして何百という絵を見たとしても、そういう絵とはめったに出合えない。山下耕平さんの絵を初めて見た時に、あ、やっと会えたという出合うべきものと出合った喜びが湧きあがった。体内の全感覚が活き活きと再編成される。人間が芸術を成すということは、人間を再生させるということだ。若い耕平さんが小さい時からいままで何を視、何を身体に閉じ込め、何を溢れ出させているのか。不器用ながらも自身の感情をひとつひとつ突破していく果敢なその姿に大きな幸せを感じた。

■選考過程「将来性」が決め手

毎日新聞社が、全国の美術関係者や芸術評論家、ジャーナリストら50人に推薦を依頼。22人から回答を得た。推薦された候補者は、23歳から35歳までの22人。男性が10人、女性が12人だった。

候補者に送ってもらったポートフォリオ（経歴や作品写真をまとめたファイル）を選考委員3人が精査し、1月中旬の1次選考に臨んだ。

1次は、各委員が気になった画家を挙げることからスタート。全候補者のポートフォリオを再点検しながら論議を重ね、岩名、薄久保、大野、設楽、寺林、山下を2次選考に残した。開催までの間、選考委員は一部候補の自宅やアトリエに赴き、実作品をチェックした。

2月中旬に開かれた2次選考では、各委員が推したい2人を提示。ここで山下が「将来的な可能性を感じさせる」と高評価を受け、すんなり本賞に決定した。

次点の奨励賞については評価が分かれ、論議が長く続いた。

選考の決め手は、若手画家を勇気づけ、具象絵画の可能性を探るという絹谷幸二賞の目的であった。画面のまとまりよりも、「もっと描きたいという、やむにやまれぬ衝動をすくい上げよう」との意見で一致。その結果、身の回りの静物を執拗に描き続ける寺林が奨励賞に決まった。力量は認められたものの、薄久保らは一歩及ばなかった。

◇推薦された人たち

岩名泰岳、薄久保香、遠藤夏香、大川心平、大塚怜美、大野智史、小田志保、川口洋子、斎悠記、佐藤翠、設楽陸、白石顕子、田中武、千葉正也、寺林武洋、彦坂敏昭、平川恒太、松井えり菜、宮本佳美、毛利そよ香、森田加奈子、山下耕平

◇回答を寄せた推薦者

翁長直樹、加藤義夫、岸桂子、児島やよい、渡沢和彦、清水有香、高階秀爾、竹口浩司、中井康之、名古屋覚、西澤美子、野地耕一郎、拝戸雅彦、林洋子、土方明司、藤田一人、保坂健二朗、三井知行、村田真、山口裕美、山本淳夫、和田浩一

（ともに50音順、敬称略）

奨励賞 寺林武洋さん

「箱」2013年 ©Takehiro Terabayashi Courtesy of Yoshimi Arts

人間くささを追求

＝岸桂子撮影

てらばやし・たけひろ 1981年、富山県生まれ。長岡造形大卒、広島市立大大学院芸術学研究科絵画（油絵）専攻修了。広島市在住。

人気の写実絵画といえば、女性像や風景が主流だ。しかし寺林さんのモチーフは、ドアノブに換気扇、ゴミ置き場の箱など、日常目にする、変哲のないものばかり。かといって、毒意が込められた静物画とも言い難い。「人間くさい絵を描きたいんです」と語る言葉に迷いは一切ない。

大学ではデザインを専攻したが、絵画への情熱を抑えきれず、写実画家の野田弘志さんが教授を務めていた広島市立大大学院へ進学した。修了の2006年、自画像を写実絵画主流の「自日会」に出品し、自日賞を受賞。順調なスタートだった。

だが次第に、自分が興味を持つのは人物ではなく、身の回りの「硬くてツルッとしたもの」だと自覚した。しかし、自日会展では「これじゃ売れないよ」などと〝助言〟されてしまう。

「他人の反応はどうあれ、自分にとってリアルなものだけを描こう」。信念を貫き、11年に退会。大阪市のギャラリー、yoshimi artsの理解を得て、同年と昨年に個展を開催。確かな手応えを得た。

選考では「本物そっくりに描くことを目的にしていない、自身に忠実な絵」と評された。

絵画漬けの毎日。この冬も、「実景を見て描く方が情報量が多い」と、強風が吹きつける自宅アパートの軒先で創作を続けた。

「回り道をした分、こうして描けることが幸せ。無所属になると覚悟していたので、今回の受賞は大きな励みです。今後も格好つけず、素直に描き続けたい」【岸桂子】